えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第97号
平成29年
(2017)
5 − 6

江戸東京博物館友の会会報

目次

ぶらり下町散歩　小さな町、亀戸の七福神を巡って‥1〜2
見学会「広重『名所江戸百景』周辺探訪　その 16」‥‥3
えど友広小路……4〜5
　会員からの投稿「裏五の謎」／えど友サークルだより／
　館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
友の会セミナー
　〔江戸っ子が惚れた赤穂事件と「忠臣蔵」〕……6
友の会セミナー「現代の刀匠、刀造りを語る」……7
学習会「目黒区立めぐろ歴史資料館を訪ねる」……8
第 17 回定期総会開催のご案内 ……8
友の会特別観覧会
　「江戸と北京　18 世紀の都市と暮らし」……9
江戸博クリップ「ふたたび両国で」……9
江戸名所図会を歩く…㉛
　［大渓山豪徳禅寺から世田谷八幡宮］……10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11〜12

ぶらり下町散歩

小さな町、亀戸の七福神を巡って

亀戸には有名な亀戸天神社があり、梅や藤の花、さらに菊の花の時期には多くの参拝者が訪れます。しかし、亀戸にはこの亀戸天神だけではなく、小さな町のあちこちに亀戸七福神が祀られています。その七福神を主体に町をご案内することにしました。

亀戸という名の由来

その昔、亀ノ島と呼ばれる海上の島があり、この島に亀村と呼ばれる村がありました。その村に亀ヶ井という有名な湧水があり、亀村と亀ヶ井が混ざって「亀井戸村」になったようです。江戸時代、この「井」がなくなって亀戸（かめいど）村となりました、と「亀戸かいわい　ぶらりマップ」に記載されています。つまり、亀づくしで、そこらじゅうに亀がいたのでしょうか。現に亀戸天神の池にはたくさんの亀がいます。

最近できた亀戸梅屋敷

ＪＲ総武線の亀戸駅北口を出ると右側に三井住友銀行があり、その右の路地に結構名が知られた「亀戸餃子」店があります。狭い道によく行列ができており、そんなときは自転車の人は降りて歩かざるを得ません。その路地を左に曲がるとすぐ明治通り、その商店街を北に向かって歩くと、蔵前橋通りと交差する四つ角に出ますが、この右角にこぎれいな造りの「亀戸梅屋敷」が建っています。こぢんまりとしたたたずまいは古い時代を思わせますが、建ったのはつい最近です。亀戸近在の品物を扱うおみやげ屋があるほか、ここでは定期的に落語会なども開かれていて、気軽に入場できます。

▲亀戸梅屋敷

この梅屋敷の真向かい、通りを渡ったところにあるのが煎り豆店で、いろいろな煎り豆が店頭に並んでいます。以前はたくさんの鳩が軒先や時には店内を歩き回っていました。鳩に豆、相性が良かったのでしょうが、その後どうやって追い払ったのか、鳩の姿を見かけません。不思議に思ってあるとき店の人に尋ねたら、笑って“これですよ”とすぐ傍の猫を指さしたので納得です。ここの小さな梅干しの形に似た梅ぼし豆が大好きでよく買いましたが、どうもあとをひくためつい食べ過ぎてしまい、近頃では横目で店を見ながら我慢、我慢です。

なかなか見られない弁財天

梅屋敷の前の蔵前橋通りを渡ってそのまま右、東方向に歩き、少し歩いて左折するとお寺の屋根が見え、やがて白い姿の仏坐像が塀越しに見えてきます。江戸時代に六阿弥陀詣の６番目の霊場として賑わった常光

寺です。『新編武蔵風土記稿』には、「春秋彼岸は殊に参詣のもの多し」とあるように、ここは庶民の信仰と行楽の対象となりました。また、亀戸七福神の一つ寿老人が祀られています。

常光寺から明治通りに戻る途中に東覚寺があり、ここには弁財天があります。その弁財天を祀ったお堂はお寺に入ったすぐ右にありますが、お正月の三が日しか開扉されず、そのお姿をめったに拝めないのが残念です。このお寺は享禄４年(1531)に玄覚法印が創建、江戸時代には亀戸不動として多くの信仰を集めてきました。また、江戸御府内八十八カ所の第73番目に登録されています。

▲香取神社

大国神と恵比寿神の香取神社

明治通りを渡って右へ歩くと、大国神と恵比寿神が祀られている香取神社があります。境内の案内表示板には、“当社の創立は天智天皇４年(665)、藤原鎌足公(614～669)が東国下向の際、この亀の島に船を寄せられ、香取大神を勧請され太刀一振を納め、旅の安泰を祈り神徳を仰ぎ奉りましたのが創立の起因”と記されています。ここでは、４月の初めの植木市や８月上旬の例大祭が地域を賑わせていますが、中でも５月５日に行われている勝矢祭(かちやさい)が有名です。平将門の乱を追討使俵藤太秀郷が見事に鎮めた故事に因んで弓矢を奉納、勝矢祭と命名されたそうです。

▲大国神、恵比寿神（香取神社、石像）

この神社を出て北十間川を右手に見ながら西に向かいます。この通りは浅草に通じた道なので浅草通りと名付けられています。分かりやすいといえば分かりやすいのですが、平凡なネーミングのような気もします。江戸通りや明治通り、さらに昭和通りというのは時代を表しているようで好きです。平成通りというのはどこかにあるのかな？などと考えながら歩きます。真向かいに見える東京スカイツリーがだんだん大きくなって迫力満点です。

途中に広重の絵「亀戸梅屋舗」で知られた梅屋敷跡の表示板と小さな石標柱が立っています。この辺りに臥龍梅(がりゅうばい)と呼ばれた見事な梅があり、多くの人たちで賑わっていたということですが、今では車が次々と通っていく道が続くばかりです。

信号を渡ってしばらく行き、左に入るとすぐのところに樹木うっそうとした天祖神社があります。

▲天祖神社

この神社の創建は古く推古天皇の治世(593～628)ということですが、その後衰退、ずっと後の応永10年(1403)に復興しました。天正年間(1573～92)に疫病が流行りましたが、織田信長の使者が参向して流鏑馬を献じたところ、疫病はたちまち治まったそうです。現在では、子供の健やかな成長を祈って、毎年９月16日に子供歩射(ぶしゃ)が行われています。また、ここには福禄寿が祀られています。

▲龍願寺の布袋尊

萩の名がついた萩寺、龍眼寺

元の浅草通りに戻って再び東京スカイツリーの方向へ歩くと柳島橋に行き当たりますが、そこは渡らずに左折し、北十間川から離れて今度は横十間川を右にして歩きます。やがて左側に時代がかった土塀が連なる龍眼寺。秋になると萩がきれいに咲き乱れるので萩寺とも呼ばれています。入ってすぐ左手には狭いながらも庭石やあずまや、それに池まで整えられたお庭があります。この池には驚くほど大きな錦鯉がたくさん泳いでいてちょっとびっくりです。境内のあちこちに萩が目立ちますが、いろいろな樹木もあり、梅、河津桜、ハナミズキなど季節により色彩豊かな所です。このお寺の創建は応永２年、古くから布袋尊として親しまれています。

このあとは亀戸駅に戻りながら毘沙門天が祀られている普門院に寄れば、亀戸という小さな町の七福神全部を巡ったということになります。このお寺も樹木うっそうとした所ですが、江戸御府内八十八カ所の第40番目に登録されています。江東区で御府内八十八カ所として登録されている５カ所のうち、先に掲げた東覚寺とここの２カ所だけが亀戸にあることになります。

おみやげは「船橋屋」のくず餅か「但元(たじもと)いり豆本店」の梅ぼし豆で、あるいは亀戸梅屋敷隣の「升本」で亀戸大根をさかなに軽くいっぱいというところでしょうか。

【取材】文・写真：広報部会・福島 信一

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 29 年 3 月 26 日）

広重『名所江戸百景』周辺探訪
―その16（南千住・向島北 周辺）―

冷たい小雨の日曜日、東京メトロ日比谷線南千住駅南口改札出口に集合、降り続く天気予報のため予定を短縮しますとの連絡があって班ごとに出発しました。

南千住駅から延命寺～総泉寺～石濱神社

駅のすぐ向かい側が線香の香り漂う延命寺です。寛文７年(1667)両国の回向院の埋葬余地がなくなって幕府から下賜され、阿弥陀仏を安置しました。明治初期に廃止された小塚原刑場の跡地です。刑死者の菩提を弔う3.6ｍの首切地蔵(延命地蔵)は花崗岩の寄せ石造りで、明治中期の南千住駅開業時、線路南側から移転してお寺の名前にもなりました。

▲延命寺の首切地蔵

幾筋もの引込み線を左に見てから渡る泪橋交差点ですが、刑場を前に今生の別れをした史実が泪橋という地名に残っています。明治通りを一筋入ると総泉寺跡です。総泉寺はかつて隅田河畔までの広大なお寺でしたが、板橋への移転時、なぜか平賀源内の墓だけ残されました。昭和初期、出身地の旧高松藩主松平頼壽(とりなが)により築地塀が整備されました。

明治通りから白髭橋の袂を少し北上すると石濱神社です。聖武天皇勅願により神亀元年(724)創建の区内最古の神社で、主祭神は天照大御神(あまてらすおおみかみ)です。源頼朝の社殿寄進を始め、その後も関東武将からの篤い信仰を受けてきました。また景勝地のため遊興客でも賑わいました。江戸期の鳥居や手水鉢、摂社・末社の案内板、狐穴など多くの史跡、石碑があります。

「真崎辺より水神の森内川関屋の里を見る図」絵

真崎(まっさき)は真先(まっさき)稲荷神社からきた地名です。今は石濱神社の境内に摂社として祀られ、跡地は神社の駐車場となっています。絵はかつての稲荷前の田楽の茶店から見た景色で、室内には椿の生け花、外に白梅、隅田川には舟や筏、右奥に関屋の里、右の森の手前に水神社の鳥居が描かれています。左奥の山並みは実際にはこの方向ではない筑波山とのことです。

「綾瀬川鐘か淵」絵

隅田川を右に見て汐入公園を進むと旧綾瀬川との合流地点の鐘ヶ淵が見えてきます。地名は川筋が釣鐘の形をしているから、曲尺(かねじゃく)のように曲がっているから、舟から鐘を落としたからなどといわれています。この辺りは春はタンポポなどの草花、秋には川面に映る月、特に初夏は合歓(ねむ)の花の名勝地として知られ、実際には綾瀬川土手にあった合歓の木を構図上、手前に描いたそうです。白鷺が飛び、筏流しも見えます。

▲木母寺の梅若塚

「木母寺内川御前栽畑」絵

水神大橋から向島方面に向かいます。絵の奥の林の中に梅若伝説で有名な梅若塚のある木母寺(もくぼじ)が描かれています。梅の字を分けて付けた名だそうです。元は墨田院梅若寺といいました。絵の内川(うちかわ)(入江)に架かる橋が幕府の御前栽(おんせんざい)(野菜)畑のある出洲に通じ、手前の女性は右建物の蜆(しじみ)料理屋に舟で来た客ではないかとのことです。現在の木母寺は内川辺りに移転しています。境内には梅若塚、梅若堂をはじめ多くの石碑、歌碑がありました。

「隅田川水神の森真崎」絵

８代将軍吉宗の頃、洪水防止で造られた大堤に桜も植樹されましたが、絵には八重桜が描かれ、右の森の中に隅田川総鎮守の水神社が見えます。手前が奥州街道です。対岸が先ほど歩いてきた真崎です。遠景はこれも構図上移動されて描かれた筑波山です。

▲隅田川神社（水神社）

一帯は防災計画のため東白髭公園や団地となり、水神社も隅田川神社となって公園脇に移築され、狛犬ならぬ石亀が鎮座しています。すぐ後ろに高速道路がそびえています。13階建て団地の高層建物が連なり、防波堤と防火壁の役目をしているとのことです。その１階の通用口は水門状で、トンネルをくぐり抜けるように進むと梅若公園です。ここが元々梅若塚のあった場所で、新しい挿絵入り案内板も目を引きます。榎本武揚像も立っていました。

▲「隅田川水神の森真崎」絵

墨堤通りの鐘ヶ淵陸橋交差点を渡り荒川土手を目前に予告通り見学を切り上げ、東武伊勢崎線鐘ヶ淵駅で解散しました。所要時間約３時間。

参加者84人。

【取材】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・菊池真一

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

会員からの投稿

裏五の謎

大橋弘依

私たち姉妹は品川で育ちました。妹とは年に数回会っては昔話に花を咲かせます。生まれ育った第一京浜国道沿いの家と両隣５軒は、大きなオフィスビルになってしまい、当時の面影は全くありません。中学校のクラス会のため、妹が久しぶりにその近所を訪ねた時のことです。あるビルに「ウラゴ」という名前が付けられているのを見つけて思い出がよみがえったそうです。

昭和30年代でしょうか、近所に駄菓子屋が４軒くらいありました。その内のひとつ、間口１間ほどの小さな店には「ウラゴ行ってくる」と言って出かけたものでした。その駄菓子屋があった場所は、「ウラゴ」の名の付いたビルに近いけれども明らかに別の通りにあります。「ウラゴって何だったの？」という疑問を妹も私も持ちました。インターネットは便利なもので、検索してみると品川区のホームページや、郷土史愛好家の方々が、詳しく解説して下さっていました。

私たちが遊び場にしていた「妙国寺」というお寺がありました。弘安８年(1285)、日蓮の弟子・天目が創建した寺だそうですが、昭和47年(1972)に「天妙国寺」と改名されたそうで、こちらの名称でご存知の方も多いようです。徳川家康が江戸入府の前日、東海道沿いのこの寺に宿泊したことで、将軍家の庇護を受けるようになり、台風や大火による破損の度に将軍家が再建したそうです。妙国寺前の東海道筋が「表門」、私の生家があった側が「裏門前」と呼ばれました。明治になり、裏門側の南品川が七丁目制に町名変更されましたが、妙国寺周辺が五丁目の区分けになったことから、境内裏の五丁目を詰めて「裏五」と呼ばれるようになったことが分かりました。「ウラゴ」は、通りの名前も駄菓子屋の正式名も知らなかった子どもたちの通称だったわけです。

地名に由来するほどの古刹とは知らず、境内に捨てられた子猫を拾ってきたことなどを懐かしく思い出します。あの駄菓子屋があった通りは、今も「裏五通り」と呼ばれているそうです。「天王祭」とも「河童祭り」ともいわれる６月の荏原神社例大祭には、今も神輿や山車が出て、品川囃子がにぎやかな裏五通りです。

えど友サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

２月17日(金)藤村一夫さんの月番で国立演芸場２月番組中席を鑑賞した。この中席の演芸内容は座長格の金原亭馬生を中心に、前半は９名の噺家が本職の落語はもちろんのこと、漫才・奇術・獅子舞などを演じて観客を楽しませてくれた。後半は目玉の出し物である鹿芝居「らくだ」が演じられた(鹿芝居とは噺家が演じる芝居のこと)。参加者20人。

３月21日(火)髙橋純夫さんの月番で浅草演芸ホールの３月下席昼の部を鑑賞した。落語協会の出演でトリが九代目桂文楽の落語だった。その他、音楽パフォーマンス、漫才、粋曲、大神楽などバラエティーに富んだ構成で十分楽しむことができた。参加者15人。

◆藩史研究会

２月10日(金)個人による発表者がいなかった場合「皆で調べる藩史」という形で開催することにした。今回が第１回目で國定美津子さん、吉野誠さん、土屋献一郎さんの３人による「鳩ヶ谷藩」(川口市鳩ヶ谷)の発表があった。参加者12人。

３月10日(金)小関征三さんが「豊後国府内藩」(大分県別府市)を発表した。慶長６年に竹中重利が３万5000石で入封した。寛永11年、子の重義が罪により長崎奉行を解任され浅草海禅寺で長男源三郎と共に切腹。同年、下野壬生城から日根野吉明が入封するが、嗣子なく断絶。万治元年、豊後高松より松平忠昭が２万2200石で入城して以来、松平近説(ちかよし)まで10代続き、明治維新後に松平を大給(おぎゅう)姓に復す。参加者13人。

◆「米屋田中家文書」を読む古文書の会

２月９日(木)米屋久右衛門の書いた明治３年の「日記」 P79～92まで読む。参加者10人。

２月24日(金)「日記」 P92～108まで。大名家へ取り次いだ中間のこと、飛脚賃の値上げ、町(ちょう)年寄りの廃止と居附(いつき)地主への引き継ぎ、使用人へ月給、出入りの医師のお供への酒代の減額などが記されている。参加者11人。

３月９日(木)「日記」 P109～126まで。大名家の下掃除(糞尿取り)代金不上納の下請人への事情聴取、家作修復に自儘(じまま)の差配人の解雇、ゆすりと思われる大名家元立会所親分と称する男との話し合いなどが記されている。参加者10人。

３月24日(金)「日記」 P126～150まで。参加者８人。

◆江戸東京を巡る会

２月18日(土)源覚寺(こんにゃく閻魔)からスタートし、伝通院で徳川の夫人達などの墓所を見学の後、紅梅で人気の牛天神を参拝し、小石川後楽園をボランティアガイドの案内で散策した。黄門ゆかりの梅林では各種の梅が満開で馥郁たる香りに圧倒された。参加者40人。

◆『江戸名所図会』輪読会

２月24日(金)菊池真一さんの担当。現在の護国寺は挿絵にある図会の頃とは様変わりで、その頃と同じ位置にあるのは本堂と鐘楼のみである。本堂西側の山間にあった西国札所写

三十三カ所観音の跡は墓地や学校敷地となっている。参加者17人。

３月16日(木)大澤憲一さんの担当。雑司が谷鬼子母神の本殿は安芸藩主浅野光晟(みつあきら)の室、自昌院殿が建立した。名所図会では寛文６年となっているが、昭和51年の解体修理において墨書や銘文が発見されたことにより、本殿は寛文４年、拝殿と相の間は元禄13年に建立されたことが確認された。これらの建造物は戦災をまぬがれて現存しており、2016年に国の重要文化財に指定された。参加者16人。

◆日本の大道芸伝承会

２月８日(水)深川江戸資料館で３月18日(土)に開催される「江戸の物売りと大道芸」へ応援出演が決まったため、発声練習(外郎売り、がまの油売り)に続き、それぞれの持ちネタ(地獄極楽、栄螺蛤公魚(さざえはまぐわかさぎ)売りなど)に磨きをかけた。参加者４人。

３月８日(水)練習は本番当日と同じ演目を行った。参加者３人。

３月13日(月)深川江戸資料館で開催される「江戸の物売りと大道芸」の現地リハーサルを行う。参加者３人。

３月18日(土)「江戸の物売りと大道芸」で日本の大道芸を多くの人々に知ってもらうため日頃の練習成果の披露公開。８時30分に集合し、最後のリハーサルを行った。当日の観客数は11時30分(第１回目)150人、14時00分(第２回目)180人だった。参加者３人。

◆江戸を語る会

２月25日(土)富士松松栄太夫さんが「江戸俗曲・都々逸について」話された。江戸時代、粋と哀調に富む七七七五調の小唄として隆盛を極めた。さらに時代は下がっても「維新調」「明治調」「都調」「街歌調」と、それぞれの時代を映す唄が続いた。富士松さんが自作の都々逸を披露した後、参加者で都々逸を作り唄ってもらった。参加者９人。

◆かっぽれの会

２月 休会。３月 休会。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

２月23日(木)太田道灌の山吹伝説で六浦山吹の里とされているところは何カ所もあるが、今回はそのうちの３カ所を尾崎孝先生の解説で訪ねた。金沢文庫駅から歩いて称名寺へ。ここで山吹伝説の一つ「道灌畑」(六地蔵)を見てから、金沢文庫(歴史博物館)を見学した。その後、再び金沢八景駅から歩いていずれも山吹伝説の地である「米倉陣屋跡」と「上行寺東遺跡」を見学、上行寺に参拝して解散した。参加者33人。

２月26日(日)１回目と同じコースを巡った。参加者34人。

３月30日(木)山吹伝説の里のうち、有力候補である新宿～早稲田を訪ねた。道灌に山吹の枝を差し出したという少女・紅皿の碑を見学、山吹坂の標柱がある大聖院を参拝。その後、雑司が谷鬼子母神と創建当初「山吹の里氷川宮」といわれた高田氷川神社を参拝。面影橋手前で山吹の里碑を見学し亮朝院に参拝後、太田道灌駒繋松のある水稲荷神社に参拝、甘泉園を通り抜けて豊島区立の山吹の里公園に行き、山吹の里づくしの半日を終えた。参加者44人。

４月２日(日)１回目と同じコースを巡った。参加者27人。

◆文士達を巡る会

３月18日(土)大磯にある島崎藤村の晩年の旧居跡を訪れた。藤村が昭和16年から亡くなるまでの２年間余りを過ごしたところであり、墓所の地福寺にも足を延ばした。旧東海道を歩き、虎御前の庵、延台寺、日本三大俳諧道場のひとつ鴫立庵(しぎたつあん)に立ち寄り、大磯城山公園内にある再建途上の旧吉田茂邸を訪れたが公開は４月からで中は見学できなかった。文化の薫りと潮の香りを感じることができた。参加者６人。

＊　＊　＊　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の２サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ａ班『新古改撰談記』

目付は、旗本・御家人の監察権、さらに将軍などが他出時の行列の供奉や火災などの非常時での差配役を担っていた。役高1000石、定員10名、布衣役。江戸城中の目付部屋にて執務し、下役である徒目付、小人目(こびと)付などの目付衆を指揮してその業務を運営していた。この部屋は老中でも内部をうかがい知ることは許されなかった。目付支配の諸役人としては、軍列の整序(徒目付・小人目付)や従者・下僕(中間・小人)、荷駄・戦場の整備(黒鍬之者・駕籠之者・掃除之者)というように一見雑多に見えるが、戦場において必須のものであった。すなわち、戦場での下働きを、平和な時代となってもそのまま江戸城内での種々雑多な下働きに充てたのが目付支配諸役人であった。

友の会めも(開催日と人数)

平成29年２月～３月

◆役員会２月14日(火)15人。３月14日(火)15人。◆事業部会２月７日(火)23人。３月７日(火)24人。◆広報部会２月21日(火)11人。３月21日(火)10人。◆総務部会２月28日(火)22人。３月28日(火)17人。◆古文書講座　入門編：２月１日(水)午前90人・午後90人。３月１日(水)午前97人・午後87人。初級編：２月15日(水)午前80人・午後66人。３月15日(水)午前74人・午後65人。中級編：２月18日(土)午前53人・午後25人。３月18日(土)午前50人・午後30人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト ２月２日(木)Ａ班９人。Ｂ班７人。２月16日(木)Ａ班９人。Ｂ班５人。３月２日(木)Ａ班９人。Ｂ班８人。３月16日(木)Ａ班９人。Ｂ班６人。

第173回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成29年2月25日）

江戸っ子が惚れた赤穂事件と「忠臣蔵」

講師　菅野俊輔さん（江戸文化研究家、歴史家）

元禄16年(1703)春2月4日、前年冬12月15日以来、城南の大名家4家にお預けとなっていた故浅野内匠頭家来46人が切腹しました。この時から赤穂事件は伝説になります。そして、討ち入りから47年目の寛延2年(1749)春2月6日に森田座で「仮名手本忠臣蔵」が上演され大当たりします。伝説が文化になった瞬間です。

元禄16年の江戸の町の動き？

記録によると、2月4日の夜、4つの大名家の出入り口には人々が多く集まり、その中を泉岳寺に遺体を運び、大きな穴一つに遺体を並べ、塚を築いて供養したと書かれています。今の泉岳寺の墓所の様子とは違っていました。

江戸の宝井其角と近松門左衛門(または浪花の何某)と伝わる手紙史料に「二月四日に片付き…忠臣と取沙汰…堺町勘三座にて十六日より曽我夜討に致し…遠慮も有るべきよしとて三日して相止め候」と江戸の当時の様子が書かれています。他にも其角と大高源吾が討ち入り当日、俳句を詠みあったという逸話も残っています。その時の源吾の句「日の恩やたちまち砕く厚氷」は両国橋のたもとに句碑が立てられており、今も有名な句といってよいでしょう。いずれも、史実かどうかは疑わしい話なのです。幕府の正史『徳川実紀』には2月に「当時異事ある時、謡曲小歌につくり…梓にのぼせ売りひさぐ事(出版して売る事)…停禁すべし。…劇場にても、近き異事を擬する事なすべからずなり」とのお触れが出たとありますが、これは機先を制して、異事(赤穂事件)を取り上げることを禁じたのでしょう。

伝説の歴史化

宝永2年(1705)『通俗演義赤城盟伝』(筆写本)が書かれます。これは元禄15年11月前原伊助が序をしたため、神崎与五郎が慎註を施した漢文体の『赤城盟伝』を入手した筆者が諸家の記聞を参照して補い、平易に仕上げたものです。

赤穂浪士46人切腹の17回忌の享保4年(1719)に『赤城義臣伝』15巻が刊行されます。翌年に絶版処分。序文を書いた穂積以貫(これつら)は大坂竹本座で近松門左衛門らの浄瑠璃脚本作成に参画。ちなみに次男は竹本座の座付き作者近松半二で、18世紀後半に活躍します。

天保7年(1836)正月、為永春水他が赤穂事件の諸史料を集め、「仮名手本忠臣蔵」をアレンジした『正史実伝いろは文庫』14編54冊を刊行。同じ頃に刊行された『江戸名所図会』の泉岳寺の項には赤穂浪士の史話が書かれています。

そして、嘉永7年(1854)、江戸で初めて山崎美成(よししげ)編・橋本玉蘭画『赤穂浪士一夕話』10冊が新刻され、翌年安政2年(1855)に刊行され、江戸でも赤穂事件が歴史となります。

伝説の文化化

元禄16年の近松門左衛門は京都で「傾城三ッ車」に敵討ちの苦心や討入りの場面をはめ込みますが、大坂の人形浄瑠璃の竹本座に招かれると「曽根崎心中」が大当たりし、しばらくは心中物の作品が続きます。3年後の宝永3年5月の「兼好法師物見車」で『太平記』の「塩冶判官讒(ざん)死(し)事」(高師直が塩冶判官の妻に懸想して兼好法師に恋文を書いてもらう話)を取り上げ、6月に続編の「碁盤太平記」では大星由良之助閑居の場、討入り、切腹の場を描いています。宝永7年、吾妻三八の「鬼鹿毛無佐志鐙(おにかげむさしあぶみ)」では小栗判官の話に変りますが、90日の大当たりを取りました。これは、この年に恩赦があり、浅野大学が安房に500石を賜って旗本に復帰したことと関係があるのでしょう。

享保年間(1716～36)以降、大坂や京都で人形浄瑠璃ばかりでなく歌舞伎でも作品がありますが、延享4年(1747)6月、人形浄瑠璃の作品「大矢数四十七本(おおやかずしじゅうしちほん)」が京都で歌舞伎になり初日から大入りとなっています。

そして、寛延元年8月、大坂竹本座で人形浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」が大当たりしました。作者の竹田出雲・三好松洛(しょうらく)・並木千柳(せんりゅう)3人の作品は「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と続けて大好評で、いずれも江戸歌舞伎三座で取り上げられています。「忠臣蔵」は翌寛延2年2月6日森田座で上演され大当たりします。5月には中村座でも上演され、6月には市村座も加わり夏には三座で揃って上演されています。伝説は文化となりました。その時の中村座での上演は西村重長画の浮絵に描かれています。

この時以来、「仮名手本忠臣蔵」は江戸歌舞伎で上演されるようになります。19世紀になると“独参湯(どくじんとう)”とよばれるようになり、歌舞伎が不入りのとき「忠臣蔵」を上演すると、かならず大入りになりました。このように赤穂事件は、歌舞伎により、江戸っ子が惚れた時代物の「忠臣蔵」になったのです。

レポーターからひとこと

面白い素材は芝居になるといいます。赤穂事件と「忠臣蔵」がその典型なのだと納得しました。

参加者128人。

【記録】文・写真：広報部会・佐藤美代子

第174回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成29年3月11日）

現代の刀匠、刀造りを語る

講師　吉原義人（よしんど）さん（刀匠）

はじめに講師の紹介がなされた後、全体を３部構成に分けて始まりました。

第1部　日本刀の制作工程
―刀剣のできるまで

日本刀の素材は「玉鋼（たまはがね）」とよばれる、砂鉄を原料とした、たたら製鉄によって作られる純度の高い鉄を使用します。

始めにこの玉鋼を赤熱しながら、３～５mm程度の厚さになるまで潰します。その後、焼入れをして硬くします。この作業を「玉へし」といいます。次に2.5cm四方の大きさに割ります。この作業を「小割り」といいます。この時に割れやすさ、また小割りしたものの断面をみて、「皮鉄（かわがね）」用の硬いものと、「心鉄（しんがね）」用の柔らかいものとに選別します。

その後、小割りした玉鋼をそれぞれ別の「テコ台」の上に積み重ね、約1300度まで加熱します。これを「積み沸かし」といいます。沸かすとは鉄を溶ける寸前の温度まで上げることをいいます。沸かすことにより、不純物などが外に流れ出ます。その後続けて、沸かす、鋼を打ち延ばしては折り返す(真ん中に切れ目を入れて二つ折りにして重ねる)、を繰り返す「鍛錬」の作業に入ります。「皮鉄」用の硬い鋼では12、3回、「心鉄」用の柔らかい鋼では6、7回折り返しを行います。この鍛錬の作業により不純物を外に打ち出し、鋼を精錬していきます。そして皮鉄と心鉄を作ります。

次に皮鉄をU字形に曲げ、芯となる心鉄をその中に入れます。つまり心鉄(柔らかい鋼)を皮鉄(硬い鋼)で包むようにします。その後高温に赤熱して一つの塊にし、打ち延ばしていきます。この作業を「造り込み」といいます。これにより日本刀は硬く、折れにくいという二つの反する性質を持つことができます。

その後、刀の寸法に合わせて長く延ばしていきます。この作業を「素延べ」といいます。この時断面はまだ長方形の状態ですが、茎（なかご）や鋒の寸法などはここで決定します。

次に素延べしたものを加熱して叩き、刀の形に打ち出していきます。この作業を「火造り」といいます。刃を薄く打ち出し、鎬（しのぎ）を立て、反りもつけます。

火造りがおわった刀をヤスリやセンで整え、最後に砥石で研ぎます。この作業を「生仕上げ」といいます。

生仕上げの次は「土置き」です。刀身に粘土、砥石の粉、炭の粉などを混ぜた焼き刃土を置きます。

刃側は薄く、棟側は厚く置きます。この作業により刃文（はもん）(鋼の結晶の変化)が決定しますので刀鍛冶の個性が出る所です。

置いた土が乾いたら「焼入れ」の作業に入ります。土置きした刀を元から先まで均一に赤熱し、水に入れ急冷します。この時に薄く土を置いた刃側のみに焼きが入り(鉄の組織が変化し硬くなる)ます。つまり土を薄く置いた所(焼きが入った所)と土を厚く置いた所(焼きが入らない所)との境界線が刃文になるのです。また焼入れをした時に刃側と棟側で硬さが変わるため、自然と刀に反りがつきます。

その後、刀の曲がりや反りなどを調整し、刀身に刃をつけ砥石で形を整えます。この作業を「鍛冶押し」といいます。

第2部　吉原義人氏に聞く
「現代の作刀」

日本刀の魅力―芸術品としての魅力

日本刀は鉄の地金(鋼)を一度も熔かさずに鍛錬した鉄で出来ているため、他の鉄製品と比べても質感と肌合いが直に感じられます。他の金属と比べても、色は違いますが、鍛えられた鋼の表面の質感もまるで違います。また、刃文があるのは世界中で日本刀だけです。これらが相まって他にはない鉄の美が生まれます。

日本での刀作りについて

自宅を作業場としていますが、弟子は現在７人います。独立して公益財団法人日本美術刀剣保存協会から無鑑査の認定を受けた人はいますが、私が一人前と認める人はこれからです。また女性の弟子は私の所には１人もいません。年間の作刀点数はせいぜい20点ほどです。

海外での刀作りについて

1980年頃、アメリカのテキサス州ダラスが最初だと聞いています。愛好家団体がしっかりしていたからです。私もまた弟子を連れて行き実演したこともあります。

第3部　吉原義人氏が答える
「日本刀についての色々」

この後、展示された日本刀を観賞しながら、刀作りの理論や手入れの仕方などについて時間の許す限り質疑応答がありました。

レポーターからひとこと

鍛冶屋の神様は女性だから、昔は美人が弟子入りすると焼きもちを焼くといわれたそうだが、かつて女人禁制であった富士山の神様と同じことを言っていると思い面白く感じました。

参加者91人。

【記録】文・写真：広報部会・光田憲雄

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成29年2月5日）

目黒区立めぐろ歴史資料館を訪ねる

東横線中目黒駅から山手通りを五反田方面に10分ほど歩き、脇道に入ってすぐに校舎と思われる建物があります。ここは旧目黒第二中学校跡で、「めぐろ歴史資料館」が設置されています。展示スペースはすっかり改装されていますが、それ以外は教室のままだそうです。資料閲覧室に集合して館についての説明を聞いた後、２つのグループに分かれて常設展と企画展を巡り、スタッフの方から興味深い説明の数々を聞くことができました。

閲覧室には「さわって遊べる」コーナーがあり、今では珍しい「湯たんぽ」、「ダイヤル式電話」、「火のし」などが展示されていました。電話機のダイヤルの回し方がわからない児童がいたエピソードなど紹介され、ここ数十年の技術革新を痛感。その他、足踏み式ミシンを動かして見せていただいたり、真空管ステレオでレコードをかけて聞かせて下さったりと、懐かしさを感じたひとときでした。

閲覧室を出て展示室に向かう時、頭上の「めぐろ歴史資料館」の「めぐろ」の「ぐ」の濁点が桜の花びらになっていることや、展示パネルの色に桜色が採用されたことなど、目黒川の桜を意識しつつ、親しみやすい資料館を目指していることが紹介されました。２つの展示室の間の床に大きな目黒区の航空写真があります。南北を逆にして見ると、区の形が帽子をかぶってホウキに乗った魔女に似ているという楽しいお話もありました。

常設展では旧石器時代からの目黒の歴史が展示されています。見学に訪れる小学生が興味を持てるように展示や説明に工夫が凝らされています。見どころは、江戸時代に盛んだった富士講と富士塚の史料でしょう。目黒には、文化９年(1812)築造の「目黒元富士」と文政２年(1819)築造の「目黒新富士」の２つの富士塚がありました。富士登山の後、麓の胎内洞穴をくぐり抜けると身の汚れをはらうことができるといわれたことから、富士塚にも洞穴が造られました。平成３年、目黒新富士跡の隣接地(中目黒１丁目・別所坂児童遊園付近)で胎内洞穴が見つかりました。洞穴は残されていないのですが、樹脂で型どりして保管され、資料館に再生、展示されています。薄暗い胎内洞穴に入ってみると、高さ50cmほどの大日如来像に出会います。発掘当時、洞穴入り口から階段を降りた地下約４mの所に５、６人が参拝可能な空間があり、さらに続く狭い横穴奥の祠の床下からこの大日如来像が仰臥した状態で発見されたそうです。なぜ床下に隠されたのかは謎とされていますが、隠れキリシタンと関係がありそうだという解説に、参加者一同興味津々でした。

企画展示室では、区内小学３年生の社会科見学を対象として「おばあちゃんが子どもだった頃」をテーマに、昭和30年(1955)前後に使用されていた道具を朝、昼、晩で分類して展示していました。懐かしい品々ばかりでしたが、木製の手回し式洗濯機だけは参加者の中に知る人がない珍しいもので、工夫された構造に感心するばかりでした。

館内の展示は好奇心を満たしてくれるものでしたが、野外にも江戸時代の数々の道標や、「陸軍用地」境界石などが展示されており、訪れたらぜひ見ておくことをお勧めしたいものが多数あります。　参加者49人。

【取材】文・取材：広報部会・大橋弘依

第 17 回定期総会開催のご案内

平成 29 年度友の会活動を確認する機会をお見逃しなく！

今年も友の会定期総会の季節がやってきました。定期総会は会員が一堂に会し、過去１年の活動を振り返るとともに本年度の活動について率直な意見交換のできる場です。今年は10月から江戸博が全館休館となり、友の会の活動にも大きな影響があります。、同封の議案書をご検討・確認をいただき、多くの会員の皆さんに活動への理解を深めていただけますよう、ご出席をよろしくお願いいたします。

開催要領は次のとおりです。

●平成 29 年度　友の会定期総会

日時：５月26日(金)13時15分開会

会場：江戸東京博物館・１階ホール

◇主な議案

・平成28年度事業報告ならびに収支決算報告

・平成29年度事業計画案ならびに事業予算案

・役員および監事の選任

●藤森館長の記念講演

総会に続いて、江戸東京博物館藤森照信館長による記念講演が予定されています。演題は「茶室とわたし」です。新館長による、友の会総会初めての記念講演です。ご期待下さい。

●会員交流会

記念講演会終了後、16時45分より、JR両国駅隣の「両国江戸NOREN」２階「築地食堂源ちゃん」において会員交流会を開催いたします。会員同士の交流、親睦を深める良い機会ですので是非ご参加ください。会費は2,500円です。

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成29年２月24日）

特別展「江戸と北京 18世紀の都市と暮らし」

２月24日(金)17時から大ホールで特別展担当の江里口友子学芸員による見どころ解説があり、その後それぞれ展示室を回って観覧しました。

今回の特別展の目玉は何といっても、ベルリン国立アジア博物館から11年ぶりに出品された、江戸日本橋の活気にあふれた町の賑わいを描いた『熙代勝覧』(日本橋繁盛絵巻)と、故宮博物院から本邦初公開の、乾隆帝80歳の祝賀の模様を描いた『乾隆八旬万寿慶典図巻』で、いずれもそのスケールの大きさと、絢爛たる色彩の豊かさに目を奪われました。もう一つ康熙帝60歳の祝賀行事を記録した『万寿盛典』も必見で、148枚の図版をつなぎ合わせると実に50ｍ余になるそうです。三つとも、どれも江戸と北京双方の当時の人々の暮らしぶりが生き生きと描かれ興味が尽きませんでした。

人口百万人の大都市江戸と清王朝前期の隆盛を極めた都北京、その両市民の暮らしを「住まう」「商う」「装う」「育てる」「学ぶ」「歳事」などのテーマごとに紹介されています。また江戸の知識人が憧れた中国の１級文物(いわゆる重文・国宝)を含む緻密で華麗な芸術作品が多数展示され、とても少ないスペースでは紹介しきれません。

特に目を引いたいくつかを列挙してみます。科挙(高級官僚試験)に合格した人の最終試験答案は流麗な筆遣いでした。またびっしりと微細な文字で書き写した科挙受験のカンニングペーパーは驚きで、何としても試験に合格したいという執念は今も昔も変わりません。絹の白地に赤い糸で経文を一文字一文字ずつ丹念に刺繍した繡経という地蔵経本は初めて目にしました。

また瓜形の青白玉製筆洗(筆の穂先を洗う器)は大きな花びらの上部に乾隆帝の五言詩が金字で彫られ、落款と印款も刻まれています。「青花御窯廠図磁器板」は白磁の板に、御窯廠(景徳鎮の官窯工房)と町並み、周囲の景色、磁器の製造工程などを描いた青花(青い文様の磁器)ですが、何と直径72.5cmもあり迫力満点でした。

そして中国絵画はどれも素晴らしく、長崎に来日、日本の画壇に大きな影響を与えた沈銓の「芝鹿図軸」や、王翬「山水図軸」、羅聘「梅花図軸」など魅力的な作品が展示されていました。なかでも焦秉貞の「張照像図軸」(張得天の肖像)は、のどかに舟遊びするほのぼのとした情景が特に気に入りました。

平成14年から始まった日中韓の博物館交流ですが、本展覧会はその一環として企画されました。今回、中国でも人気のキャラクター人形モンチッチ(萌謝謝)が入り口付近で、チャイナ服姿で出迎えてくれましたが、来年は北京での開催が予定されています。日中友好の架け橋となったモンチッチ、きっと熱烈な歓迎を受けることでしょう。

参加者88人。

【取材】文・写真：広報部会・岡本　脩

(この展覧会は４月９日に終了しました)

江戸博クリップ

「ふたたび両国で」

管理課事業推進係　中村純一（なかむら じゅんいち）

昨年４月、管理課事業推進係に採用となりました。江戸東京博物館の職員として地域連携業務を中心に、右も左も分からず緊張の毎日で１年があっという間に過ぎました。それまでの40年、民間企業でもまれてきました。50代では駐車監視員としてスカイツリーの工事の進行とともに、この両国界隈で働いていました。残念ながらちゃんこ料理は一度も口にしたことが無く、国技館や回向院に入ったこともありませんでした。しかし、江戸博には足を踏み入れたことがありました。１階の床面に明治時代と現代の東京の地図が描かれていたのは今でも忘れません。これが何かの縁だったのかもしれません。

地域連携業務では、両国協力会の運営及び「両国にぎわいMAP」の運営と作成、「両国にぎわい祭り」(以下「祭り」)の実施にも携わっています。2003年(平成15年)に９社で発足した協力会も今では16社となり、「両国にぎわいMAP」も28万部を作成するまでになりました。この業務の担当として、各社皆さんの力を集約し、両国地域への貢献がいかにできるか、縁の下で微力ながら無い知恵を絞っています。

元々お祭りは大好きでしたが、裏方に回るのは初めてです。「祭り」の開催期間中は、10店舗を超すちゃんこ屋さんへの衛生面での厳守事項の徹底、火気の扱いと食品・飲料の監視など、事故や食中毒の防止に努め、気の休まることがありません。「祭り」に携わってきた事業推進係の皆さんや前任者、応援に来てくださった方々の苦労が身をもって分かりました。今後も皆さんの力を借りながら地域連携業務に邁進してゆきます。

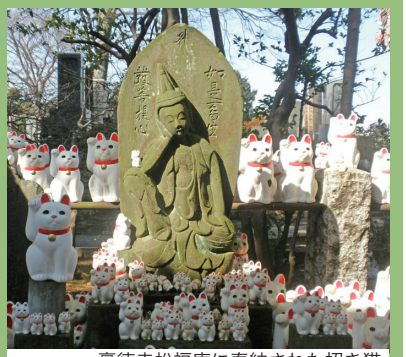
学生時代にバスケットで鍛えたこの身体ですが、既に３回メスを入れています。皆様も健康には十分ご留意ください。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㉛

[大渓山豪徳禅寺から世田谷八幡宮]



豪徳寺松福庵に奉納された招き猫

今回は世田谷区の豪徳寺から弦巻の辺りを巡ります。世田谷城跡をはじめ世田谷吉良氏の遺構が数多く残る地域です。歩いたのは梅の香る２月下旬から３月上旬でした。

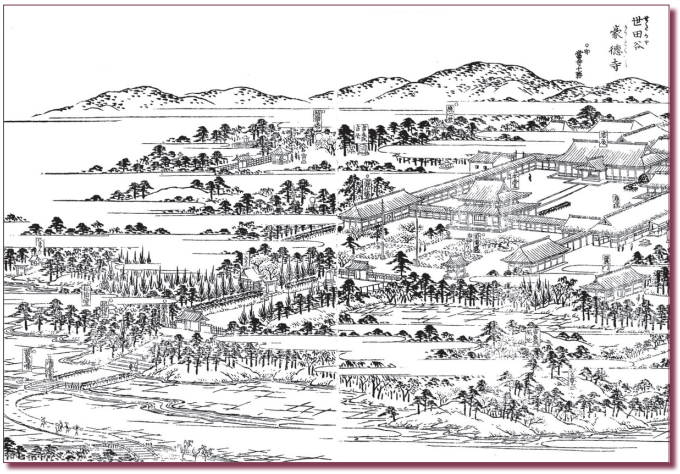
大渓山豪徳禅寺から吉良氏古城の跡

小田急線豪徳寺駅下車、豪徳寺商店街から世田谷線沿いの道を南に向かいます。宮の坂駅手前を左折すると、彦根藩井伊家の菩提寺であった大渓山豪徳禅寺の山門(四脚門)脇に出ます。門を入った正面が延宝５年(1677)建立の仏殿で、裳階(もこし)屋根に「三世仏(さんぜぶつ)」の扁額が掛かっています。引き戸は閉められていますが、小窓から三世仏木造坐像を拝むことができます。また、右手の鐘楼には同７年銘の梵鐘があり、ちょうど紅梅に彩られていました。左手には井伊直孝にちなむ言い伝えのある招き猫を祀る松福庵(招福庵)があり、堂の脇には奉納された招き猫の置物がびっしりと並んでいます。訪れた人の多くが写真を撮っていました。墓地の奥には井伊家の墓所があり、井伊直弼の墓は都の史跡になっています。

山門から参道を進んで前の通りを左に行くと、吉良氏古城の跡(現世田谷城趾(じょうし)公園)があります。世田谷城は貞治(じょうじ)５年(1366)に吉良治家によって築城されたといわれ、天正18年(1590)の豊臣秀吉小田原攻めに伴い廃城となりました。城郭は現在の豪徳寺を含む広大なものであったと推定されています。公園内には空堀や土塁の一部が保存され、実際に歩いてみると往時の地形を体感することができます。なお公園となっているのは一部分ですが、隣接する住宅地の裏手にも遺構のあることが見て取れました。

宮坂八幡宮から延命山勝光禅院

元の通りを戻って宮の坂駅前の踏切を渡ると、すぐ右手に世田谷八幡宮があります。図会の本文ではここを宮坂(みやのさか)八幡宮としていますが、挿絵では世田谷八幡社となっています。源義家が創建し、吉良頼康が再興したと伝えられています。明治時代には宇佐神社となりましたが、戦後元の名称に戻されています。現在の社殿は昭和39年(1964)改築ですが、文化10年(1813)建造の本殿が中に収められています。また、古来より奉納相撲が行われており、江戸郊外三大相撲の一つとされていました。鳥居を入った右手に土俵が残されており、現在でも９月の秋季大祭で奉納相撲が行われるそうです。



▲長谷川雪旦：世田谷豪徳寺

鳥居正面の道から烏山川緑道を横切って住宅街の中を歩いていくと延命山勝光禅院の裏へ出ますが、塀越しに見える竹林が実に見事です。参道へ回って正面の山門をくぐると、すぐ左手の墓地に吉良家歴代の墓所があります。中興開基吉良氏朝の孫・義祇(よしのり)以降の墓28基がコの字形に並んでおり、かつての繁栄が偲ばれます。境内には元禄11年(1698)銘の梵鐘があり、手前のシダレウメおよび背景の竹林との対比が鮮やかでした。

鶴松山実相院から世田谷八幡宮

勝光院参道から再び世田谷線沿いに進み上町駅前から世田谷通りを渡っていくと、ボロ市で有名な代官屋敷通りへ出ます。通りの中程にある世田谷代官屋敷は、井伊直孝から世田谷領15カ村の代官に任ぜられた大場家の居宅跡です。茅葺きの表門は国の重要文化財に指定されており、実に堂々とした造りです。母屋の裏庭では白梅が満開でした。

南側の駒留通りを渡ると弦巻３丁目で、この辺りは江戸時代には弦巻郷と呼ばれていました。右手に進むと鶴松山実相院の北門があります。門を入ると左手に巨石が幾つも置かれてあり、非常に目を引きました。当寺は勝光院の末寺で吉良氏朝夫妻の墓碑があったようですが、今では所在不明です。ただ氏朝の位牌のみが本堂に残されているとのことでした。

山門を出て松丘(まつがおか)小学校の脇道から左の遊歩道を進んでいくと、ゴルフ練習場の裏手に弦巻神社があります。当地に祀られていた稲荷社に八幡社(弦巻４丁目)と向(むかい)天神社(弦巻１丁目)を合祀して、明治41年(1908)に弦巻神社と称したとのことです。図会の本文で世田谷八幡宮としているのは、どうもこの八幡社のようです。『新編武蔵風土記稿』には「わづかなる祠なり」「古へ鶴ヶ丘八幡社領なりし」と書かれています。鳥居は立派ですが、本殿はややこぢんまりとしています。境内には「弦巻整地碑」が立てられていました。ここから弦巻通りに出て、田園都市線桜新町駅に向かいました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一
(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

古文書講座

5月から第1期を開講

新年度第1期は5月から開講します。申込の受付は終了していますが、以下日程をお知らせします。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：5／10(水)、6／7(水)、7／5(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5／17(水)、6／21(水)、7／19(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：5／20(土)、6／24(土)、7／22(土)

- 時間：各講座とも
  午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

エンレイソウ
カット：福島信一さん

友の会特別観覧会

● 2017年NHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」特別展「戦国！井伊直虎から直政へ」

◆NHK大河ドラマ関連の特別展「戦国！井伊直虎から直政へ」が開催されます。直虎は、仲間と力を合わせて井伊谷を治め、幼い嫡子の命を守り、井伊家発展の礎を築きました。本展覧会はドラマの主人公井伊直虎と、幕末の大老・井伊直弼の先祖にして徳川四天王の一人と数えられた井伊直政を軸に構成されています。担当の杉山専門調査員に「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- 開催日：7月7日(金)
  17時～17時30分：見どころ解説
  杉山哲司専門調査員
  17時30分～19時：特別展示室自由観覧
- 申込締切：6月26日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール／1階特別展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】瀬谷葉子(事業部会)

友の会セミナー

第177回（大河ドラマ「おんな城主 直虎」と時代考証）

講師　小和田哲男さん(静岡大学名誉教授)

◆今回は大河ドラマ「おんな城主 直虎」の時代考証をされている小和田先生に時代考証についてもお話しいただきます。戦国乱世、遠江国井伊谷にあって、戦国大名今川氏の支配下に置かれた当主井伊直平は、娘を人質に差し出し今川氏に臣従しますが、嫡男直宗は討死し、弟二人も誅殺されてしまいます。しかし孫の直盛に男子なきため、ただ一人の女子が井伊家存続の運命を背負うことになり、次々と起こる不幸の中で、永禄8年(1565)、井伊谷城の「おんな城主」誕生となるのです。

◆講師略歴：おわだ・てつお
昭和19年(1944)生れ。1972年早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。2009年まで同大学教授。NHKテレビ「歴史秘話ヒストリア」や、Eテレ「知恵泉」に出演。NHK大河ドラマの「秀吉」、「江～姫たちの戦国」「軍師官兵衛」などの時代考証も多数務める。専門：日本中世史、特に戦国時代史。著書は『戦国の城』、『歴史ドラマと時代考証』『戦国10大合戦の謎』他多数。

- 開催日時：6月17日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：6月8日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】國定美津子(事業部会)

第178回「江戸図の出板を考える ー二つの江戸切絵図に至るまでー」

講師　齊藤智美さん(明治大学文学部兼任講師)

◆江戸時代を通じて、江戸の絵図は、たくさん出板されました。時代や江戸の町の変化とともに、江戸図も様々な変化をしていきました。その中でも、特徴的な絵図が江戸切絵図です。切絵図は、江戸を分割して絵図化したもので、江戸を紹介する書籍や博物館などで利用されることも多いです。切絵図を見たことはあっても、なぜ発行されたのか知っている人は少ないと思います。切絵図を含めた江戸図の出板事情について、具体的な史料を交えながらお話します。

◆講師略歴：さいとう・ともみ
明治大学大学院博士後期課程修了。博士(史学)。平成21年(2009)より文京ふるさと歴史館専門員。著書に『江戸名所図会の研究』。

- 開催日時：7月15日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：7月6日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】小林弘明(事業部会)

「えど友広小路」投稿募集！

忙しい現代の東京の生活の中でも，ふとしたときに江戸からのつながりを感じたりすることはありませんか？　身の回りの普段意識していないことに江戸との関連を発見したりすることはないでしょうか。また，江戸東京に関連することで，あなたが思ったり感じたり，誰かに伝えたいと思うことや，日頃からいろいろ関心を持って調べたりしていることはありませんか？

そんな日常の中で感じたことや発見を「えど友広小路」欄に投稿してみませんか？

「1964年の東京オリンピックに関する思い出」の投稿も引き続き募集しています。

広報部会ではみなさんの投稿をお待ちしています。投稿いただいた原稿は順次掲載させていただきます。

原稿は江戸博「友の会事務局」宛にお送り下さい。

送付先：〒130-0015　東京都墨田区横網１-４-１
江戸東京博物館「友の会事務局」

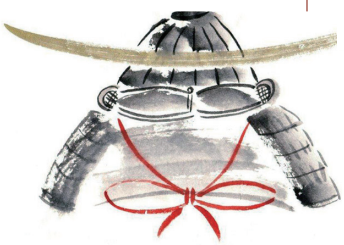
また，原稿を電子メールでも受け付けできるようにしました。下記**専用アドレス**にお送り下さい。ご意見，ご要望をメールでいただくこともできますので，ご活用下さい。

広報部会メールアドレス：
edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

◆普通はがきの値上げについて

催事の申込みでお使いの普通はがきが平成29年**6月1日**より現行の52円から**62円**に引き上げられます。

52円のはがきをお持ちの場合には、10円切手を貼ってご使用ください。



カット：佐藤美代子さん

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●特別展　「没後150年 坂本龍馬」

会　期：４月29日(土･祝)～６月18日(日)
会　員：一般670円、65歳以上340円、大･専門生540円
同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大･専門生860円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。

●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

お詫びと訂正：『えど友』96号で料金の誤記がありました。訂正してお詫び申し上げます。

次回予告

●2017年 NHK大河ドラマ「おんな城主　直虎」特別展「戦国！井伊直虎から直政へ」

会　期：７月４日(火)～８月６日(日)

会期残り僅か お見逃しなく！

企画展のご案内

●「戦時下東京のこどもたち」

会　期：３月７日(火)～５月７日(日)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

次回予告

●「発掘された日本列島2017」(仮称)

会　期：６月３日(土)～７月23日(日)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日

5月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

6月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

催事のお申込方法

◆普通はがきに、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号(必須)
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館「友の会事務局」
＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第97号
平成29年５月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910